

アルトゥーロ・ペレス・レベルテ著「戦場の画家」

集英社文庫 2009年2月26日刊を読む

1. オルビドは誰にたいしても、アイロニーと親しみのまざった、あの得意のほほ笑みで応えた。意見を言うときは、洒落て気のきいたユーモアをこめ、どんな相手にもあわせながら、自分を譲らずに会話ができるという、人並みはずれた才覚をもちあわせていた。レストランやホテルでチップをわたすときも、小声でジョークをかわしあう者同士みたいに、そっと相手の手のうちにすべりこませた。それに、彼女が声をあげて笑うとき 仲間とぐるになっていたずらをした少年みたいな笑いかたをする、この女のためなら、あるいはこの女を笑わせるためなら、どんな男だって、自分の命さえ投げだそうとするにちがいない。
2. ともかく、そういうことすべてに、彼女は長けていた。礼儀を心得た人間は、とっても簡単に人をひきつけるものよ。相手が興味のある話をしてあげるだけでいいの。そんなことを言っていた。五カ国語をあやつりながら、言葉と沈黙によって、人をひきつけることのできる女、信じがたい器用さで相手の声色やジェスチャーを真似し、どんな些細なことも忘れない、すばらしい記憶力をもっていた。フォルケスは、ホテルのボーイやウエイター、タクシーの運転手にたいしてまで、彼女がきちんと名前と呼ぶのをきいていた。相手がつかっている俗語表現や訛り^{なま}を自分でもすぐ取りいれるし、憤慨しているときは、イタリア人の血にふさわしく、優雅に隠語を言い放つ。それに、社会的地位の低い人たちのいじけたところを中和する、大らかな器用さももちあわせていた。
3. いつかはこの世の中をひっくりかえしてやろうという愚かな考えにとらわれながら、しづしづ他人に仕えている人間や、自尊心をもって、あきらめとともに自分の社会的役割を受けいれている人間たちの慇懃さの奥に隠された^{ひがみ}を、彼女は、さりげなく忘れさせてやるのだ。女たちは姉妹のような親近感をもってオルビドを羨望し、男はみな、ひと目で彼女が気に入って、この女を守る側にまわった。二十世紀のはじめごろオルビドがもし男に生まれていたら、朝はカフェでホットチョコレートの朝食をとり、夜になればタキシードを着て、使用人たちがひかれる屋敷の夕食会に招かれたり、舞踏会でダンスに興じていたにちがいない。フォルケスにはそういう彼女の姿が、ごく自然に想像できた。

[コメント]

現代スペインの代表的作家が作品の中で示す理想の人間像、現代に生きる「知識人」の条件がこの文章の中には示されているように私には思えるヨーロッパの美術に関する知識が十分にあれば 100 倍以上面白いと思われる作品。

- 2009 年 4 月 29 日林明夫記 -